

【 復活のトロパリ 第2調 】



しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死 生 命 爾 死 降
と き、かみのせいひかりにてぢご
時 神 性 光 地 獄
くをころせ り。しせしものをちかよ
殺 死 者 地 下
りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復 活 と 時 天 軍 皆
よびていえ り、いのちをたもうしゅ
呼 曰 生 命 賜 主
ハストわがkamiよ、こうえいはなんぢに
吾 神 光 榮 な 爾
き 歸 す。

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒 等 同 座 者 忠
じつにしてしんちなるハストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖
なるしんにえられたるふえ、ハストのあい
神 撰 笛 愛
にみちたるうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光

しよ うしゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ
照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 なん ぢ の ぼ く ぐ ん の た め 、 お よ び
爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
三 者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

せ い せ い しゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に なん ぢ を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 なん ぢ は は じ め わ が く に に お い て お の
爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い しゃ と し り た れ ど も 、 ハ イ ス の
外 來 者 知 ども 、 ハ イ ス の

ひ か り と あ た た か き を な が し 、 なん ぢ の て
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことな爲し、かれらにか
 屬 神 子 爲 し、 彼 等 神
 みのおんちょうをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにより
 今 此 教 會 の 爲 に 祈
 たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 ぜんのかきゅうせいしゅよ、なんぢはかよりふ
 全 能 救 世 主 爾 墓 復
 くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
 活 地 獄 奇 蹟 見
 おののき、ししゃはおき、ぞうぶ
 慄 の 死 者 起 造 物
 つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
 見 爾 偕 喜

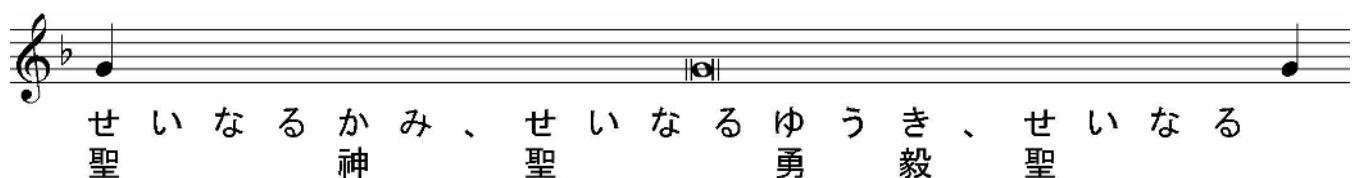


司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に
つうかい た われらいや ふとう なんち しょぼく こ とき おい なんち
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が
せい さいだん こうえい まえ た なんち とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た
聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる
もの しゅさい なんちみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんち
者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
じんじ もつ われら のぞ われら およ じゅう じゅう つみ ゆる わ たましい
仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈
からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんち つと え たま せい
と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖
しょうしんぢょ こせい なんち よろこび な しょうせいじん きとう よ
なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんち せい われらこうえい なんちちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、



【 聖三祝文 】





じょう せいの ものよ、われらを あわれめ
常 生 者 我 等 憐

によ。 せいなる かみ、 せいなる ゆう き、 せい
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょう せいの ものよ、われらを あわれ
常 生 者 我 等 憐

め よ。 せいなる かみ、 せいなる ゆう き、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょう せいの ものよ、われらを あわれ
常 生 者 我 等 憐

れ め よ。 こう えい は ち ち と こ と せい しん
光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せいなるじょう せいの ものよ、われらを あわれ
常 生 者 我 等 憐

れ め よ。 せいなる かみ、 せいなる ゆう
聖 神 聖 勇

き、 せいなるじょう せいの ものよ、われらを
毅 聖 常 生 者 我 等

あわれ め よ。
憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第2調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{プロキメン} プロキメン、^{しゅ} 主は、^わ 我が ^{ちから} 力、^わ 我が ^{うた} 歌なり、^{かれ} 彼は ^わ 我が ^{すくい} 救となれり、



誦經) ^{しゅ} 主は ^{きび} 厳しく ^{われ} 我を ^{ばつ} 罰したれども、^{われ} 我を ^し 死に ^{わた} 付さざりき、



誦經) ^{しゅ} 主は、^わ 我が ^{ちから} 力、^わ 我が ^{うた} 歌なり、



【 アポストロス 使徒經 194端 コリント後書 11章31節～12章9節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒 ^{じん} パヴェルが ^{たつ} コリント ^{こうしょ} 人に ^{よみ} 達する ^{後書} の ^讀 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄 ^{かみ} 弟よ、^{われら} 神、^{しゅ} 我等の ^{ちち} 主 ^{よよ} イイス ^{しゅくさん} スハリス ^{もの} トスの ^わ 父、^{いつわ} 世 ^{らざる} 世に ^お 祝 ^お 讚 ^ま せらるる ^は 者は、^わ 我が ^{いつわ} 謊 ^{らざる} 謊 ^{をしる} を ^し 知る。 ^{おい} ダマ ^{おう} スク ^{まちづかさわれ} に ^{とら} 於 ^{ほつ} て、 ^ま アレ ^ま タ ^{まも} 王 ^を の ^を 邑 ^を 宰 ^を 我 ^を を ^を 執 ^を えん ^を と ^を 欲 ^を して、 ^を ダマ ^を スク ^を の ^を 邑 ^を を ^を 守 ^を る ^を 。 ^{われか} 我 ^{もつ} 筐 ^{まど} を ^{かき} 以 ^{したが} て ^つ 牖 ^お より ^お 牆 ^{かれ} に ^て 循 ^{のが} い、 ^{ほこ} 縋 ^わ り ^を 下 ^を され ^を て、 ^を 彼 ^を の ^を 手 ^を を ^を 脱 ^を れ ^を たり。 ^を 誇 ^を る ^を こと ^を は ^を 我 ^を が

ため えき ところ けだしわれしゆ けんげん もくし およ われ あ いちにん し
 爲に益する 所 なし、蓋 我 主の顯 現と默 示とに及ばん。我ハリストスに在る 一 人を知
 る、此の人は 十 四年 前に、(肉 體に在りてか、知らず、肉 體の外に在りてか、知らず、神
 之を知る、) 第 三 重 の天に擧げられたり。我此の人に於て、其 (肉 體に在りてか、肉
 體の外に在りてか、知らず、神 之を知る、) 樂 園に上げられて、道い難き 言、人の語る
 能わざる 者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇らず、或 は我
 の弱きを誇らんのみ。我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋 眞を言わん、然
 れども我 自 ら 戒 む、恐らくは人、我に見る 所、或 は我に聞く 所 に過ぎて、我を
 擬らん。默 示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一 の棘は我が肉 體に與えられ
 たり、即 サタナの 使 なり、我を撃たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。我三次 主に之
 を我より離さんことを求めたり。然れども主は我に謂えり、我の恩 寵 は爾に足れり、
 蓋 我の 能 は弱き中に行 わる。故に我 寧 甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの
 能 の我の内に寓らん爲なり。

(比較用 口語訳) 永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言っていない
 ことを、ご存じである。ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視し
 たことがあったが、その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのが
 れた。わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わ
 たしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた
 ——それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らな
 い。神がご存じである。この人が——それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、
 わたしは知らない。神がご存じである——パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、
 人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろ
 う。しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。もっとも、わたしが誇ろ
 うとすれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよ
 う。わたしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買
 いかぶられるかも知れないから。そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えら
 れた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。このことについて、わた
 しは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵み
 はあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリスト
 の力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾 に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾 の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

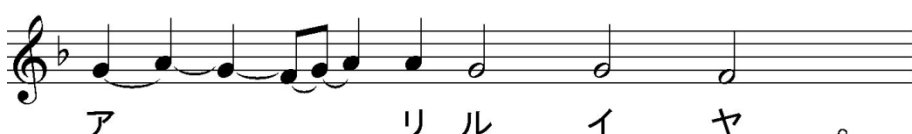
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き} 願わくは主は 憂 の日に於て 爾 に聴き、^{かみ な なんぢ ふせ まも} イアコフの神の名は 爾 を扨ぎ衛らん、



誦經) ^{しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま} 主よ、王を救え、又我等が 爾 に呼ばん時、我等に聴き給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主 宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 浄 き光 を輝 かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾 が福音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に 爾 の福たる 誠 を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ 爾 の喜ぶ 所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ 行 いて、屬神の生活を通ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾 は我が 靈 と體 との光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 30 端 7 章 11～16 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とし な まち ゆ そのもと たにんおよ} 謹みて聴くべし、彼の時イイスス、ナインと名づくる邑に往けるに、其門徒の多人及び

^{おお たみ かれ とも ゆ まち もん ちか とし かしこ ししゃ か いだ はは} 衆くの民は彼と偕に行けり。邑の門に近づきし時、彼處に死者の昇き出さるるあり、母

^{ひとり こ そのはは やもめ まち たみおお かれ とも しゅかれ み あわれ} の獨の子にして、其母は嫠なり、邑の民多く彼と偕にせり。主彼を見て、憫みて、

^{かれ い な なか すなわちちか ひつぎ ふ か ものとどま かれい わかき} 彼に謂えり、哭く勿れ、乃近づきて、櫬に觸れたれば、昇く者止れり、彼曰えり、少

^{もの なんぢ い お ししやお ざ かつい これ そのはは あた しゅう} 者よ、爾に謂う、起きよ。死者起きて坐し、且言えり、イイスス之を其母に與えたり。衆

^{みなおそ かみ さんえい い おおい よげんしゃ われら うち おこ かみ そのたみ かえり} 皆懼れて、神を讚榮して曰えり、大なる預言者は我等の中に興れり、神は其民を眷

みたり。

(比較用 口語訳) そののち、間もなく、ナインという町へおいでになったが、弟子たちや大ぜいの群衆も一緒に行った。町の門に近づかれると、ちょうど、あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだので、葬りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが、その母につきそっていた。主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいる者たちが立ち止まったので、「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。すると、死人が起き上がって物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった。人々はみな恐れをいだし、「大預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神をほめたたえた。





※ 聖体礼儀③（金ロイオン）へ